

新居格と中国

—あるアナキストにとっての「国境」—

西村正男

1 忘れ去られた知識人・新居格

新居格（にい・いたる）。現在の日本において、この名前を聞いて彼がどのような人物であったかを説明することのできる人は多くないだろう。それは彼がかつて戦前・戦後の日本において知らぬ者がいないような著名人であったのに、現在では忘れられているということによるだけでなく、新居自身の活動が多岐にわたり、彼の活動に対し一言以ってこれを蔽うような肩書きが見あたらないことにも由来するであろう。新聞記者、作家、評論家、翻訳家、思想家、政治家、随筆家、生活協同組合運動家、アナキスト、ジャーナリスト、モダン文学者といった肩書きの何れにも当てはまりながら、その何れか一つの肩書きのみでは新居を言い表すことはできないのである。

新居は 1888 年に板野郡撫養町（現・鳴門市撫養町）で生まれ、板野郡大津村大幸（現・鳴門市大津町大幸）の祖父母の元で育った。キリスト教社会活動家・作家として知られる賀川豊彦は同年生まれの従弟に当たる。徳島中学（現城南高校）、鹿児島第七高等学校、東京帝大法学部を経て新聞記者となり、アナキズム関係の評論などで知られるようになる。フリーランスになった後はモダニズム運動にも接近し、映画評論、創作、翻訳等多方面において活躍し、戦後は初の公選杉並区長となる。体調を壊し辞任後、1951 年に死去している。

このような多方面に渉る活動をした新居に対し、その業績を全面的に再検討することは容易ではないが、彼が二度にわたり中国を旅行し、中国に対し長い間関心を寄せていたという事実は注目に値するように思われる。事実、現在新居の名が冠せられた書物は新刊書としてはほとんど手に入らないが、唯一現在も入手できるのが、新潮文庫版のパール・バック著、新居格訳『大地』（中国を描いた小説として著名）なのである¹⁾。また、彼が二度目の訪中の際、魯迅の知己を得、有名な「声なき処において驚雷を聴く」という句を含む七絶を送られていることも、魯迅研究者には知られているだろう。本稿では、このような新居格と中国の関係を主にその二度の中国旅行を中心に紹介し、新居が如何にして国境を越えて中国人と交流し、そしてその交流に限界があったとすれば那邊にあったのかを検討してみたい。

2 新居格と中国

2-1 二度の中国旅行

まず、ここでは新居の二度の中国旅行について確認しておきたい。

2-1-1 一度目の訪中(1929年)

新居が初めて中国を旅行したのは1929年のことである。彼自身中心的な同人であったモダニズム系雑誌『近代生活』同人との五十日間の旅行だった。

この旅行の目的については不透明な部分が多い。林俊によれば、「中国の農民あるいは労働者の現状を視察し、当地のアナキストとの連帯の可能性を探ることがその目的であった³⁾」ということだが、根拠がはっきりしない。一方、『近代生活』誌を捲ると、その編集後記にあたる「FINALE」欄に以下のような記述を見出すことができる。

新居格が支那へ行く。

「満鉄の提灯を持つために金千円也を支給されたんだ。」

と冷言したら、

「いや、支那のことは、絶対に書かんよ。絶対に……。」

と例によつて明るい苦笑、彼によると明るい苦笑であるが、客観的にはさう明るくもない苦笑を洩らしてみた³⁾。[後略]

果たして、新居が本当に満鉄から金銭を得ていたかどうかは不明だが、南満洲鉄道を離れ、中国側の鉄道に乗る際に満鉄の関係者の斡旋で一等のパスを得ていることはその記述から確認できる⁴⁾。ひとまずこの旅行の目的の詮索は擱き、以下では新居の記述に基づき、その行程を追跡してみたい。

香港丸に神戸から乗船し、大連に到着したのは八月中旬あたりと思われる⁵⁾。大連滞在中、旅順までドライブをし、旅順のヤマト・ホテルで昼食をとったこともあった。旅順では白玉山に登り、大連の星ヶ浦(現・星海公園)のヤマトホテルではアイ스티ーを飲む。親戚のH医学博士、満洲日報社のAと大連のボンベイという踊り場を見たという⁶⁾。その後、奉天(現・瀋陽)へ向かう。ここでは、加藤武雄と共に伯彦蒼という内蒙古人に案内してもらう⁷⁾。奉天からは南東へ向かい、五龍背温泉で加藤武雄と別れ、堀口九万一、戸川秋骨と安東(現・丹東)へ行く。安東滞在時には、国境の鴨緑江を越え、新義州へ散歩に行くこともあったという。その後奉天に引き返し、そこから六時間弱列車に乗って四平街(現・四平)到着。駅前の旅館に宿泊する。この四平街から中国の鉄道に乗り換えることになるので、満鉄の八木沼という人物の斡旋で四平街駅長趙

鎮から一等バスをもらい、翌朝洮南(現・洮安)へ向かい、途中鄭家屯で軍隊の輸送のため四時間待たされた末午後八時半に洮南に到着する。洮南は物騒で、必死の思いで満鉄公所にたどり着く。チチハルへ向かう予定を取りやめ、四平街へ引き返すことにするが、駅に向かう馬車が嫌疑を受け、中国兵士に包囲されるが間一髪で危機を逃れる、などかなり危ない目にあったようである⁸。

八月末頃、ハルピンに到着して観光した後⁹、新居は大連で山田一夫と落ち合い、共に大阪商船の河南丸に乗り込み、天津・北京へと向かっている¹⁰。北京では、街を歩き回り後海のほとりなどを散策し、辻聴花らと共に前門外の正陽楼で烤羊肉を食し、五芳齋、全聚德などでも食事をしている。百順胡同瀟湘館で歌妓小之花に会い、さらには京劇鑑賞にも出かけ、名旦として知られる荀慧生と楽屋で握手し、郝寿臣とも会食しているが、そこには京劇通として知られる(これより八年前に芥川龍之介が訪中時に京劇鑑賞した際にも案内役を務めた)辻聴花らの協力があつた。崇文門街を歩き、ダンスホール「インターナショナル」にも行ったという¹¹。

天津から頭等列車に乗って上海に向かい、上海には一週間滞在する。やはり山田一夫が同行し、豊陽館を宿として三階の洋間に宿泊した¹²。滞在中、上海毎日新聞社で、丸山晚霞と共に「文芸と絵画の夕」と題する講演をしているが、より興味深いのは、立達学園で同校と国立労働大学の学生に対して講演をしていることである¹³。新居はいくつかの文章でこの講演について書き留めているが、ここでは「上海交会線」と題する文章から引用することにする。

日がとつぷり暮れてからわたし達は自動車を駛らせた。空は暗くて星はなかつた。江湾一帶の夜の風景は物しづかな郊外として車の窓に映つた。

講題は「Black International」

講演の後で Wei Wheilin 君が私に云ふ、

「ムシュウ B、あなたはフランス語をお話しになりますか。」

「いゝえ、少しも。」

「では、程氏を通じてお話しをしたいと思います。」(これは支那語である。衛惠林君は日本語は話せない)

「ただいまのお話にありましたネストル・マフノ氏とはわたくし巴里で始終往復していました。マフノ氏もブラック・インターナショナルに就いてはしばしば熱説されてゐましたよ。」

わたし自身は新聞雑誌を通じてマフノを知つて居るだけだつたので、聴衆の中にマフノをそんなにも親しく知つてゐる人がゐたのを発見していささか面食らつたのであつた¹⁴。

国立労働大学は、国立ではあるもののアナキストでありかつ国民党員の李石曾や、やはりアナキストの沈仲九が設立準備に加わり、日本のアナキスト山鹿泰治、石川三四郎等も教壇に立ったことがあった。また立達学園もアナキストの匡互生が設立した学校であり、無政府主義的傾向が強かった。新居は、他の文章では「日本では中止なしには済まない講演を、思ふまゝに思想的立場を鮮明にしえて闊達な気持になつて引上げた¹⁵⁾」と記しており、講演に満足したことが窺える。立達学園へは車で内山完造と共に向かい、通訳は理学士・程祥栄が行ったという¹⁶⁾。新居の上海でのアナキストとの交流は、この講演に留まらない。さらに新居の文章を引用する。

私の宿に数名のアナーキストが訪れて来た。彼等は共同租界には居ないで、或はフランス租界や城内に住んでゐるのだと云つた。『何しろ上海に居ると食へるからねえ』と、彼等の一人が云つた。東京で一、二度逢つたことがあるやうに思ふ彼等である。朝鮮の独立運動を企ててゐる連中、彼等は今となつてはボルシェヴィキと合体した運動形態になつても居やうが、彼等の策源地は上海であり、特に城内であるとのことであつた。佐野学は上海で捕へられた。日本人の住む地域には日本のスパイが多く派遣されて、彼は鵜の目鷹の目で獲物を視らつてゐるのだとも教へられた。無政府主義者の老闆土岩佐作太郎は相当長く上海にゐて立達学園だつたか、労働大学に身を寄せてゐた。石川三四郎も労働大学に講演に行つてゐたことがある。わたしの宿を訪ねてくれた衛恵林、呉克剛の二君はアナ系の人々だつたが、彼等はどうも手も足も出ないから消費組合運動をするより外はないと云つてゐた¹⁷⁾。

少し不明瞭ではあるが、最後の一文が中国人アナキストについて述べているのを除けば、その前は上海在住の日本人アナキストについて述べているのであろう。新居は早くからアナキズム系の雑誌などに論文を寄稿し、この時期は表面的にはアナキズムとモダニズムに二股をかけているような状況であつたが、それが彼の中では共存しており、上海の近代生活を享受するだけでなく、日中のアナキストたちと交流し、自らの思想を講演で明らかにすることも忘れていなかったのである¹⁸⁾。

上海でのその他の活動として無視できないのは、当地の文学者との交流であろう。新居が上海の文学者たちと知り合つたのは、ご多分に漏れず内山書店であり(日本の文化人が上海の文学者と知り合うために内山書店を訪れるのは当時定番コースとなっていた)、彼は同書店に二、三回訪れ、張資平、程祥栄、郁達夫らとそこで知り合つた。郁達夫と出会つたのは9月21日であつたことが、そ

の日記の記述から確認できる⁷⁹。新居らは、郁に上海案内をしてもらい、半淞園、静安寺路の外人墓地、ジョッフル街、極司非而公園、南京路のカフェ・フデラルなどに遊び、郁がこの後安慶へ行って安徽大学で『源氏物語』を講じる予定であることなどを聞く⁸⁰。この五日後の9月26日は北四川路「新雅」にて安徽に行く郁達夫の送別会兼新居等の歓迎会が催され、張資平、田漢、傅彦長、鄭伯奇、鄭祥榮、陶晶孫、大毎の波多江種一と田中幸利、竹屋治三郎、秋元次郎、三菱会社の竹内良男と平野勉、日清汽船の松尾免洋、菅原英次郎らが列席した⁸¹。張資平、田漢、鄭伯奇、陶晶孫らはみな日本留学経験があるか、あるいは日本で育った著名な文学者である。

アナキスト、文学者らだけでなく、当然ながら上海在住日本人との交流の機会も多かった。また、日本においても都市のモダンな風俗を文章に汲み取ることによって長けていた新居が魔都上海の風俗に目を向けぬ訳が無く、種々のダンスホールやドッグ・レース、歓楽施設の「大世界」、売春婦などについても数多く言及していることは言うまでもない。帰国の前日も、マゼスチックホテル(大華飯店、現在の南京西路・梅龍鎮伊勢丹付近)のサタデーダンスに出かけており、その翌日長崎丸で帰国の路についたのだった(中国映画の日本配給を目的に渡中していた川喜多長政と同船⁸²)。

この訪中の結果、新居は中国についての論述を本格的に始めることとなった。また、中国関係書籍の翻訳を始めるきっかけを得たのも、この中国旅行である。これについては新居自身に語ってもらうことにする。

わたしは昨年夏から秋にかけて支那を旅した。その際上海南京路のケリー書店で求めた「征服者」は旅中の訳者に非常な感興を与へた。そのとき賀龍共産軍並に張発奎等の共産軍は漸く動き始めてゐたときであつた。蒋介石の排斥、汪兆銘推戴の機運が濃厚に流れてゐたときだつた。だから、旅中で偶々買い求めた「征服者」の一篇は南支の時局と照応して一層の興味をわたくしに与へたものであつた。

帰来この小説の訳出に志したのである⁸³。

これは、アンドレ・マルローの『征服者 *Les Conquérants*』を改題して新居が翻訳出版した『熱風』に付された「訳者序」の一節である。新居は南京路のバンドから入ってすぐのところにあつた別発書店(ケリー&ウォルシュ社)でマルローの『征服者』を買い求め、中国の生活を直視し得た小説として感銘を受けたのだった⁸⁴。そして新居は、これ以降パール・バックや林語堂の中国に関する著作の翻訳を手がけることになるのである。

2-1-2 二度目の訪中(1934)

一度目の訪中後、旅行記などを多く書き記し、座談会などでも中国にしばしば言及した新居は、1934年に再度訪中することになる。この五年足らずの間に、中国の情勢や日中関係は大きく変化していた。1931年の満洲事変、1932年の第一次上海事変と「満洲国」建国を経て、人々の目が中国、特に「満洲」に向いていた時期であった。今回の訪中について、「最も主要な目的はパール・バック女史を訪問することにあつた²³」と新居自身が記しているが、人々の目が「満洲」に向かう中で、新居が華南地方を旅行先を選んだことは注目に値する。その理由について、新居は以下のように記している。

[前略] わたしが南支の旅を選んだのはわたしだけには理由があつたのだ。

一つは、南支に対する日本人の知識と動向とを明かにしなければならぬこと。

二、蒋介石政権に対する広東派の動きがもつとよく注目されていゝこと。

三、その両者の間に介在する政治的勢力であるところの赤色区域の問題。

四、南支における外国勢力の現状と将来。

少くとも、此等の問題は何れも重要なものばかりである。尚、上海事変後二ヶ年に亘る日貨排斥の推移がどうなつて居り、またどうならうとしてゐるかの情勢も知らねばならぬ問題である。

このような目的を持って新居は5月20日、神戸から長崎丸に乗り込んだ。長崎からはユダヤ系ロシア人で晩年を日本で過ごしたピアニスト、レオニード・クロイツァーが乗り込んできたという。22日、午後4時過ぎに上海・郵船碼頭に到着し、多数の友人知人が出迎えを受け豊陽館ホテルへ向かった新居だが、上海に到着するやいなや、「ひどく怪しい気持ちになつてしまつた²⁴」という。第一次上海事変がもたらした都市の空気の変化を、新居は敏感に感じ取っていたのではなからうか。

その日のうちに内山完造の好意で内山書店に移ることになった新居は、翌23日、友人に会い、フランス租界ヘドライブに行き、前回も遊んだ逸^{カニドローム}園にも出向いたりしているが、この日初めて魯迅と出会っていることも特筆されるべきであろう。24日も新聞記者や総領事を訪ねたり、ハイアライを見に行くなどする。25日も新聞記者などに会い、松本重治らと食事をし、また自然科学研究所を訪ね、また徳島県人会にも出席しているが、その一方で内山書店において鄭伯奇や穆木天などの文学者にも会っている。同日深夜の列車で南京に向かったが、翌26日南京に着いてからパール・バックは南京に不在であることを知る。南京では中山陵を訪れ、ニューヨーク・タイムズ特派員を訪問するなどし、28

日上海に戻る。同日夜魯迅と語らい、30日夜には、魯迅、茅盾、沈端先(夏衍)、田漢、鄭伯奇、陶晶孫、穆木天、内山らと石路(福建中路)知味観で食事をしている²⁷。31日は大学の同窓でもある公使館の河相達夫書記官の招宴で、新聞記者等と食事をするが強硬論を唱える現実主義者が多いことに違和感を感じたという。6月1日には同郷の前田丞と、第一次上海事変の戦跡である廟行鎮へドライブし、その帰りに江湾の労働大学、立達学園(前回の訪中時に講演をした学校)の跡を、さらに市政府の建物を見る。午後はフランス租界へ出かけ、夜は再び前田と八仙橋の慈芳院の芸者家を見学に行き、黄包車で南京路のチョコレートショップへと向かう。翌2日は上海毎日新聞社、日本人倶楽部等を訪問後、エドワード路の四川料理陶楽春で会食する。中国側から外論編訳社、新声通訊社記者の遠学易、大晩報社の崔万秋、新聞報記者の陸詒君等、明星影片会社のスター女優高倩蘋が列席している²⁸。その後日本人仲間とダンスホール「大華跳舞厅」へと出向いている。翌3日は前田と城内見物に出かけ、城隍廟を見ている。

翌4日午後11時、白山丸に乗り込み、8日朝7時香港に到着。平岡貞の出迎えを受け、島を一周しビクトリア・ピークを観光している。夜は千歳ホテルに宿泊する。翌9日金山号で広州へ、日清汽船広東支店の社宅に滞在、川越総領事などを訪問する。翌10日越秀山に登り、夜は川越総領事の招宴。11日は中山大学に何思敬教授(1896-1968、日本に長く留学し、この頃既に共産党加入。人民共和建国後も大学教授や政府要職を歴任)を訪問するも不在で他の人に会う。夜は日本人倶楽部で講演。12日の午後香港に戻り、13日、国民党右派の首領で蔣介石と対立していた胡漢民と会談する。14日夕船に乗り上海へ、18日に到着し、ダンスホールなどを訪れた後、20日帰国の途に就く²⁹。

今回の旅行で特筆すべきは、魯迅や胡漢民といった中国を代表する作家や政治家と出会ったことであろう。新居自身、彼らについては旅行記等とは別に文章を書き残しているが、魯迅からは娘のために版画集『引玉集』を贈られ、また七絶を贈られ掛け軸に揮毫してもらっている³⁰。

2-2 小説「上海へ」

また、この1934年の旅行に基づき、新居が小説「上海へ」を執筆していることも興味深い。上海を旅する主人公の名前は天津幸吉であるが、これは中篇小説「ニゲラ」³¹と共通し、新居の育った故郷である天津村大幸に由来すると思われる。この小説で、主人公大津幸吉は夫のいる女性伊地知街子と「抜差しならぬ状態」になり、上海への逃避行を企てる。先に黙って一人で上海に赴いた街子から幸吉の下に住所のない手紙が届き、幸吉は上海へ出発する。上海の風景やエピソードが散りばめられた小説のプロットは末尾に近いところでやや

く大きく展開する。幸吉はエドワード路の四川料理陶樂春での会食に出席、中国紙の記者や女優たちと同席する。その翌朝の情景の描写を以下に引用しよう。

朝早く幸吉の部屋に訪づれた萩原は皮肉な頬笑みを浮べて、黙って幸吉に一枚の支那新聞を渡した。幸吉はそれを手にして何の気なしに目を遣ると、驚いたことには街子の写真が麗々しく掲載されているばかりでなく、すぐその下に大津幸吉氏の愛人伊地知街子夫人と説明してあるではないか。長々と恋愛暴露の記事を書いた揚句、大津幸吉氏の来滬は街子夫人を追いかけて来たのだ、と報じ、街子のことを「妃是薄命的美麗的感傷詩人」と描写してあった。

幸吉も黙って支那新聞に目を落してゐたが、支那紙の記者がどうして街子の写真を手に入れたのか、そして何のためにこんな暴露をしたのか全く腑に落ちなかつた。しかもその新聞記者は昨夜の会合に出席してゐただけにあくどいにも程があると幸吉は憤慨しない訳には往かなかつた³²。

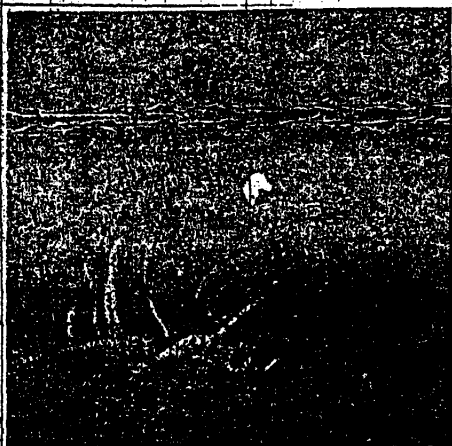
この直後、街子が部屋に入ってきて、幸吉が事態の真相を知るところで小説は幕を閉じる。この小説は、事実と思われるエピソードも多く盛り込まれており、また新居自身の他の記述と共通する箇所も少なくない。それでは、「街子」の存在や中国紙の記事については架空だろうか。

私は6月2日の会食に大晩報社の崔万秋が列席しているところに注目し、上海図書館において『大晩報』のマイクロフィルムを調査した結果、6月4日の同紙副刊(文芸欄)『火炬』に、当該の記事を発見した。標題は「新居格一夕話」、署名は蔡晃である。内容から日本文学通であることが看取でき、また会食に列席しているところから見て、『火炬』の編集をしていた崔万秋(1904-、『三四郎』等の中国語訳で知られ、国民党特務との繋がりもあり、後に台湾政府の駐日大使館の参事官を務めた)の筆名であることは間違いなからう(日本の読音では、「崔」と「蔡」はともに「サイ」であり、「秋」と「晃」はどちらも「アキ」と読める)。添えられた写真には「新居格氏之愛人 大井幸子」と説明が加えられている。この文章はまず新居の日本文壇における位置を説明し、会食の際の新居との会話などを紹介した後、唐突に「後になって日本の文壇の状況に話が及び、筆者は東京にいたときに付き合った多くの友人を思い出した」として、武者小路、松岡譲に始まり多くの文化人の名前を列举し、「なかんずく、新居格氏の愛人大井幸子女史である。一度時間のない中で会っただけではあるが、彼女が新居格の愛人であり、また頭山満の親戚でもあり、さらには彼女は薄命で美しく感傷的な詩人であるため[原文:「又加她是薄命的美麗的感傷的詩人」]、当

実際の新居と大井の関係の詮索は措くにしても、主人公の恋愛やその他のスキャンダルなどを描くことにより、この小説は上海のロマンチックかつスキャンダラスな一面を強調している。

（蘇晃）

新潮中央公論，改是
等有權威的雜誌上也常見
他的名字。要之，他是日
本現代社會上一種很聰明
的吃文筆飯的「JOKE MAN」。
日本文人到中國來過
的很少，森島中郎的
芥川龍之介的支那遊記



大非幸

人之天情也新

新居格，在日本文壇，
任什，據說學如我者，
並非什麼重要的角色，
他寫小說，然而既寫
稗史、久米，又加稗
史的通俗讀者層；又
吟詩，佐助、島崎，
而探視藝術作家的地
位也長谷川如是閑，
不似長谷川如是閑，
雄，正宗白鳥那樣說
，魄力也不如大宅壯
川均等雄厚。你說他
邊上沒有地位麼？是
於，體質強健的文藝

因爲唐人多，又加無雲之霧，不便細談，所以未能多聽其對華之印象。他只說他這一次到上海，比五年前來時觀感已大不相同。第一次來時，因爲受美國影片影響太深，總以爲上海是一個狗屁不可謂的地方；有人說，這國的趣味，他簡直想不到也許還有更動的；夜出聽見雞打聲，以爲是雞鳴聲來索票，但現在則不然了。他說他對於中國的新認識，較前充足對於中國的感想也沉着下來了。關於中國女子的衣服他說及之五年前也步多。我問他，對於中國文化界人士的觀感如何。他說這次所會見的人，完全不是上次來時所會的人，好像中國文人之風俗，遠度也頗不弱。後來他表稱來時時與舊日「舊日」一語，對於他稱爲外，各正難誌也。託他留心中國電影事業的觀察，所以他能體會一會高占非、胡蝶、高倩卿、鄭正秋、程步高等演員及導演。

後來談到日本文壇的情形，使我回憶到在東京時所交遊的許多朋友，如武者小路實篤、福田清人、三浦洋子等，三十年代，林美英子，其甚靜枝，生出北世，山本華子女士等。其是最新出的大井幸子女士等，雖只匆匆一面，但因爲她是初居的愛人，又如她是山田滿的親戚，又當時是傳名的魔魔的頭腦的詩人，所以當時預備了一個文藝雜誌發行的照片，到現在還保存在我的寶篋裏。現在預判於此，諒以道而來的新居格氏自身，並不是覺它一塵不染。

2-3 その他の中国との関わり

以下では、上述の二度の旅行以外の新居と中国との関わりを、特に盧溝橋事変以前を中心に簡単に紹介したい。

2-3-1 極東反戦大会(1933.9.30)と宋慶齡

新居は、「蓮の実」と題する文章の中で 1933 年に上海で開かれた極東反戦大会に言及している。それによると、ことの次第は以下の通りである。ある日警察が新居の家に家宅捜索に来た。新居が上海で開かれる反戦会議の日本の通信拠点になっているという嫌疑であったが疑いは晴れた。ところがしばらくして上海在住の知り合いの青年Eから「蓮の実の砂糖漬けを送る」という手紙が届き、警察もすぐに検分に来た。検分の結果、蓮の実の砂糖漬けの缶から手紙が見つかり、警察に押収されてしまったという。

宋慶齡が「わたしは彼が trustworthy であることを知つてゐる」と云つたさうだが、未知未見の彼女がわたしを知る訳がない。またわたしのやうな無名の三文文士が未知未見の状態で彼女に判かる訳はないと思つた。彼女はいい加減のことをチャーナリストであるEに云つたのだらうし、Eもただ職業柄彼女にも接近したのであらうし、またチャーナリストとして、日本代表として誰が来るかと知りたかつたにちがひない。ただEはわたし以外に適当な人を知りませんので先生にお頼りするより外はないのでお訊きしたのですとも書いてあつた。

トーマス・マンも上海会議に出席の予定だったが、ナチスに殴られて来られなくなつたとか、会議は上海では持てなくなつたので、どこか東洋の他の場所で開くか、それとも汽船をチャータして何国の領海にも属しない海上で開くか、なぞの説もあると報じてあつた。その点、Eはきはめてチャーナリストらしい筆で書いてあつた。前にも云つたやうに、さうでなくとも仮定的容疑者であるわたしは、わたし宛の上海からの手紙が発見されたので(その手紙も亦私の無関係を証明するものではあつたが)又困つた。わたし自身のためでなくEのために。折角上海で彼が築き上げてゐた記者的地位に差障りはないかどうかとの心配が生じたからである³³。

新居の述べるのとおり、宋慶齡が新居のことを深く知っていたとはあまり思えない。が、この文章の記述にはそれなりの信憑性があるように思われる。船をチャーターして会場で会議を開く、との案は実際にあったようで、出席はしなかったものの大会主席団名誉主席に選出された魯迅も、1934年12月10日付けの蕭軍、蕭紅あての書簡で、「あのときの会議は、陸上で開かれました。船の上

ではありません。³⁴」と述べていることと符合する。また新居は、前述の小説「上海へ」でも「蓮の実」に描かれた手紙の検分のエピソードを挿入しており、そこでは手紙と蓮の実を送った青年を「萩原」としている。この萩原は、主人公・大津幸吉が上海に渡った後、上海の案内をするなど、小説中で重要な役割を演じているが、新居自身の旅行記では澳弘治という人物が符合する。澳弘治については、大井幸子と同様、今後の調査課題としたい。

2-3-2 中国文学研究会との関わり

中国文学研究会とは、東大支那哲文科在学中であった竹内好が、岡崎俊夫、武田泰淳を誘って 1934 年初めに設立した会であり、旧来の「漢学」「支那学」を批判し、外国文学研究の方法論を持って機関誌『中国文学月報』（後に『中国文学』に改題）を刊行、1943 年 1 月に解散した。当時としては画期的であったこの研究会とは、新居格も少なからぬ関係を持っている。会の最初の公式行事は周作人・徐祖正（耀辰）の歓迎会（1934.8.4.）であったが、竹内好は中国から帰国したばかりの新居と連絡を取り、協力を新居に求めたが、新居は歓迎会に佐藤春夫、島崎藤村、与謝野鉄幹、堀口大学、村松梢風らと共に列席したばかりか、自ら司会も務めている。この経緯は当時の竹内好の日記に詳しい³⁵。また新居は『中国文学月報』創刊号（1935.3.5.）にも祝辞を寄稿しており、会の発足初期から『中国文学月報』創刊までの時期にかけて、会に対して協力的であったことが窺える³⁶。さらには中国の女性作家・謝冰瑩が早稲田大学文科に合格直後、「満洲国皇帝」溥儀の来日に備えた警察に拘留される事件が起きた際にも、中国文学研究会が謝冰瑩により組織されたとする新聞の誤りを指摘し、会を弁護する文章を書いている³⁷。さらに、『中国文学』第 68 号（1941.1.1.）の「アメリカと中国特輯」に際して「アメリカ、中国、日本」と題する座談会に参加している。

2-3-3 台湾旅行（1936）

また、新居は二度にわたり中国大陸を旅行したのみならず、日本の植民地統治下にあった台湾にも足を運んでいる。「華麗島」という文章で新居自身が記しているところによると、1 月 13 日の正午に神戸を出航、16 日午後 1 時頃、基隆着。台北、屏東（21 日）、高雄（20 日）、台南などを回り、十日あまり滞在している³⁸。この台湾旅行中で特筆すべきこととしては、かつて台湾民族運動の指導者でありこの当時は隠棲状態にあった林献堂を、台中に近い霧峰庄に訪問したことである。案内として同行したのは楊逵、張深切ら当時の台湾を代表する文学者だった。林献堂とは時事に触れず、専ら歴史や文学について語ったという³⁹。

2-3-4 翻訳

最後に、新居に関わった中国に関する書物の翻訳についても触れておきたい。『征服者』の翻訳については先に触れたが、その他林語堂『我国土・我國民』(*My Country and My People*)やパール・バック『大地』(*The Good Earth*)の翻訳も手がけている。林語堂(1895-1976)は牧師の息子として福建省に生まれ、教会立の小学、中学、上海の聖セント・ジョンズ約翰大学を卒業、後にアメリカ(ハーバード)、フランス、ドイツに留学、その後魯迅等と交わり、また小品文という散文のスタイルを提唱するなど、文壇の寵児となった。『我国土・我國民』はパール・バックの勧めにより、中国人の性格や文化、生活様式などを欧米人と対比させる形で描いた英文著作である。新居は同書を翻訳した理由を「支那人とその文化を批判した良書であるといふ以上に、それらについての精確な知得は今日の我々日本人に取って極めて必要であると信じたからである」⁴⁰と説明している。

一方『大地』の翻訳であるが、新居は早くから同書に感銘を受け、二度目の訪中の主な目的も、パール・バックに会うためであった。新居は同書の翻訳権を取得したところ、新居宅に出入りするようになっていた深沢正策が生活費のため翻訳の実作業を申し出、深沢の訳稿に新居が手を入れる形で共同作業が続けられた。1935年に刊行された翻訳の印税は折半するはずであったが、その後映画化された『大地』のヒットに合わせて刊行された小説の普及版(1937.10.~11.)もベストセラーとなる。深沢はその印税を独り占めしたばかりか、新居を著作権侵害と詐欺横領で告発した。だが、深沢の側に非があるのは明らかで、新居の主張が結局は通ることになったという⁴¹。新居はその後パール・バックのその他の著作、『ありのままの貴女』『龍子』なども翻訳している。

新居が『我国土・我國民』の翻訳について述べた、中国についての知識が「今日の我々日本人に取って極めて必要である」という翻訳理由は、これらの書籍全てについてあてはまるのではないだろうか。

以上、新居と中国の関係を主に盧溝橋事変以前を中心に概観した。次節では、日中戦争下の新居の評価をめぐる、「生活者論」からの肯定的評価に対して、中国との関係など幾つかの視点を示すことにより、戦時下の新居格を多面的に浮き彫りにしたいと思う。

3 日中戦争期の新居格とその評価をめぐる

3-1 「生活者論」からの肯定的評価

言論統制が進む戦時下における新居格の文筆活動に対し、近年肯定的評価が

寄せられている。それは、新居の言う「生活者」という言葉に注目し、彼が戦時下においてもこの「生活者」の立場を失うことはなかったという評価である。小松隆二は、新居が「生活」「生活者」という言葉を重要な意味を持って取り上げることになるのは昭和十年代からであるが、それ以前から新居は生活を思索や執筆の基礎にすえ、戦中・戦後を通じてそれは変わることがなかったとする。アナキズムに関わった新居が、反政治・反権力、自分自身を絶対視しない市井人とならしめ、昭和十年代以降の時代の逆流の中、生活者の視点を持ち続け、戦時下にも時流を批判し、戦後にも自らの一貫性を示すことができた、というのである⁴²。また天野正子も新居が「生活者」の手による文化性の必要を主張することにより国策的な新生活運動への抵抗を試みた、として、基本的に小松の主張を踏襲する⁴³。小松も天野も共に、新居が戦時下の娯楽自粛の動きに異論を投げかけたり、あるいは隣組制度を批判するなど、新居が時流に抵抗していたことを具体的に論証している。確かに、当時の新居の言論からは、積極的に戦争反対を唱えるわけではないものの、随所に時流に阿らない批判精神を垣間見ることが出来る。以下に一例を挙げてみよう。

寒いから銭湯で暖まつて来るとわたしがいふと、妻から「兵隊さんのことを考へなさい」とたしなめられた。ところで、わたしは今し方見た南支派遣軍の部隊長のことを考へてゐた。今頃なら南支は一番季節のいゝときだらうと思つてゐた矢先だつたので、細君の教訓とちぐはぐになった。[中略]

先達ても街へゆくと、路上で学生達が呟き合つてゐた。「また狐が大分出て来たやうだな」むろん婦人のする狐の襟巻をさして云つてゐるのだ。ある時期から狐の襟巻も高価でないもの、いつてみれば、三百円以下なら差し支ひなしとなつたとかだが、そんな価格のほどは毛皮商でない限り見分けの点くものではないから、右のやうな学生の慨言があつた訳であらう。

ところで、わたしは男のマントの襟に毛皮がついたのを見ると考へさせられる。女の狐の襟巻が不可いものなら、男の外套やマントの襟の毛皮も仮令狐でなくとも引込めた方が公平でよさそうに思ふ⁴⁴。

また、「戦争と文学者」と題する文章では、戦時下において文学に制限が加えられ、表現が困難になることを率直に認めている。

戦争の場合には、その上に戦時的な制限が外部からなされる。拘束を本質的に欲しない文学者にとつて、制限は苦痛である。戦時は文学者を窮屈にさせ、遠慮勝にさせる。このことは正直の表現を生命とする文学者にとつて相当の苦痛である。しかし、文学魂といはうか、さうしたものはあるより外はない

ことを所期しなければならぬ”⁴⁵。

このように見てくると、新居が戦時下も批判精神を持ち続け、言論統制の中にあっても自らの考えを曲げずに主張したことは疑いないように思われる。ただ、新居の中国に対する認識や中国人との関係は、日本の中国侵略が深まる中においても変わることはなかっただろうか。以下では、新居の戦争下における中国との関わりを確認することにする。まずは郁達夫との関わりから見てみたい。

3-2 新居格と郁達夫

郁達夫(1896-1945)は、若くして日本に留学し、旧制第八高等学校、東大経済学部を卒業している。留学中に執筆した「沈淪」は、中国の文壇に大きな反響を呼び、以来中国の近代文学を代表する作家として活躍した。新居が最初の訪中の際、郁達夫の案内で上海を散策したことは前述の通りだが、まずその後の両者の関係をここで確認しておきたい。新居の二度目の訪中の際には、郁達夫は上海にはおらず、新居は郁達夫の兄、郁華(郁曼陀)に会うのみであった。その後、1936年11月から12月にかけて郁達夫が来日した際、両者は再会している”⁴⁶。翌年の盧溝橋事変により日中戦争に突入してから、二人の連絡は途絶えたままだったが、1940年、読売新聞社の企画が二人を結び付けることになる。当事者の一人であった作家・小田嶽夫の証言を以下に引用する。

昭和十五年のことだが、読売新聞が日本と中国の文学者同士の往復書簡を掲載する案を立てた。武者小路実篤と周作人、新居格と郁達夫、私と魯迅未亡人許広平(私は「大魯迅全集」の訳者の一人というだけでなく、昭和十二年三月上海へ遊んださい彼女を訪ね、相識の間柄になっていた)、という具体案がきまった。周作人は日本占領地域の北京にとどまっていた。許広平女史は上海にとどまっていると思われた。郁達夫ははっきりしなかったが、読売新聞社がシンガポールにいることを突き止めた”⁴⁷。

そして、読売新聞社から送られてきた新居の手紙を受け取った郁達夫は、返信をそのまま読売新聞社に送らずに、応答を新居の手紙と共に自ら編集するシンガポールの華文紙『星洲日報』副刊『晨星』(1940年6月1日、3日)に「敵我之間」と題して掲載した。

それによると、手紙を受け取った後、彼はどのようにすればよいか思い悩んだ。これを無視すれば小国民の度量の狭さと笑われ、また応じて敵国の新聞に文章を書けば、歪曲されて翻訳され、宣伝の材料にされたとしたらどうすべきか。このように考えて、郁は新居の手紙の翻訳と共に返答を『晨星』に掲載

することにするのだという。

訳載された新居の手紙の大意は以下のようなものであった。

…岡崎俊夫君の訳したあなたのすばらしい小説「過去」を読み終えたばかりで、あなたの思い出が脳裏に去来しています。あなたに上海の公園や外国公墓を案内してもらったこと、あなたが安徽大学へ行って『源氏物語』を講ずる予定だと語ってくれたこと等を覚えています。その後二度目に訪中した際、お兄様の郁華氏に会い、あなたが上海に来ていて前日に杭州に帰ったばかりだと聞かされました。私が上海に来たことを知ったなら残念がるだろう、とも。でもその後東京でお目に掛かりお話することが出来ました。

戦争が起きました。あなたはどこにいますか。何をしていますか。いつもこのことを気にかけています。個人間の感情は両国間の不幸なことによって変わることはありません。これはあなただけではなく私の知っている中国の友人すべてに対して思っていることです。私は祈っています、両国間の不幸が早く取り除かれ、以前と同様、いや以前よりももっと親密に芸術について語り合うことが出来る機会が持てるように。実のところ文学に従事する同志の間ではたいていの場合互いに理解し率直に語り合うことが出来るものです。「人間性」は共通の問題なのですから。両国間が根本的に平和に生まれ変わることが、冷たい人と人との関係を相互に信頼させる鍵となるでしょう。戦争は必要なく、政策も必要ありません。正直に言って私は二十世紀の現状に懐疑を持っており、今は政治家の言論の時代だと感じています。これは人類の生活に何らかの欠陥が存在するからで、我々創造者はこのような欠陥に対して創造を加えるという重責を放棄してはならないと思いますが、どうですか、郁君！〔日本語原文は未発表であるため中国語訳より要約した。〕

これに対し郁達夫の応答は手厳しいものであった。こちらも要約して紹介する。

敬愛する新居君、戦争中にあっても私のことを気にかけて頂きたいへん有り難く思います。あなたのおっしゃるように国家と国家の間に不幸があっても個人間の友誼は変わることはありません。個人間の友誼だけでなく、民衆と民衆の間の同情も同様に存在していると信じます。例えば、日本の、戦争に参加したために中国に来ることとなった友人たちはすでに重慶、桂林、昆明などで我々の優待を受けています。彼らは自ら同盟を組織し、演劇募金活動、難民負傷兵救済など我々と共に仕事をしています。彼らが日本語で演じた「三兄弟」という芝居は我々同胞が見て涙を流したほどです。新居君！人の情は世界中で同じものです。正義感、人道、良心は誰もが持っているもの

です。王陽明先生の良知の説は今に至っても覆ることのない真理なのです。

日本国内の状況は私には分かります。政治や時局については言う必要はないし、たとえば言ったとしてもあなたは目にすることはないでしょう。ただ一つだけ言いたいのは、中国の民衆は戦争によって大いに進歩したということです。彼らは団結、忍耐の必要、犠牲を惜しまない心を知りました。戦争はこの中国の土地で行われ、爆撃で死んでいるのは彼らの肉親なのですから。日本の爆撃が彼らの国民観念を呼び覚ましたのです。

私自身も、土地や財産、老母、あなたのお会いになった兄、蔵書、妻を戦争のために失いました。が、私はただ一つの信念だけは持っています。正義が私のすべての損失を償ってくれるだろう、という信念を。

あなたのおっしゃる「二十世紀の現状に対する懐疑」、「我々創造者は本当にこれらの欠陥を補わねばならない」という言葉には全く同感です。現在中国の創造者たちはそれぞれこの仕事をしています。中国の文芸は三年の間に三百年もの進歩を遂げました。中国の知識階級はみな真の創造者になりました。もしあなたが中国の内地に来て観察することが出来れば、これが空言ではないことがお分かりになるでしょう。

今回の戦争で中国の人心は大いに改良されました。中国の民衆も真の平和と偽の平和を見分けることが出来ます。平和はきつといつの日か東半球にもたらされるでしょうが、彼らは今は残念ながらまだその時ではないと感じているのです。

新居君！私が先に書いたことは威嚇的な大言壮語だと思われませんか。いいえ、これが自由中国の実情なのです。物事を観察するには、実情を見なければなりません。偏った言葉を盲信してはならないのです。

私には日本にいる友人は本当に多く、四年前の訪日の際に皆様に歓待を受けたことは、今もありありと心の中を巡回しています。お返事のついでに、ここでそれらの友人たちの健康を祈りたいと思います。そして新居君、あなたに対して申し上げますと、私は我々はきつと握手して歓談する日が来と思っています。その時には、あらゆる平和を阻害し戦争を策動する魔物は天国に行くか地獄に墮ちるかしていることだと思います。その時、私たちは真心で、真摯な気持ちで、芸術を語り、それによって世界の人類のあらゆる欠陥について補う方法を考えましょう⁴⁸。

郁達夫の言及した「三兄弟」とは、プロレタリア文学者鹿地亘が中国で捕虜となった日本人兵士を組織して結成した在華日本人民反戦同盟が上演した劇である。新居の手紙は、文学者の責務を説いている点で先に引用した「戦争と文学者」の論旨と共通し、当時の日本の時局にあつてはこれが精いっぱい発言で

あったかも知れない。だが、それに対し郁達夫は中国で反戦に立ち上がる日本人や自らの受けた戦争被害、中国の現状を述べることで、実際には中国の現状を視野に入れていない新居に対し、強烈な応答を返したのである。この手紙は、結局読売新聞に掲載されることはなく、三組の往復書簡のうち掲載されたのは武者小路と周作人のものだけであったという⁴⁹。鈴木正夫は新居と郁達夫の手紙について、以下のように述べている。

この二通の書信から、両者の態度意識の相違がはっきりと看取される。新居がおそらく軍国主義的色彩がいやましに強くなった当時の社会情勢のしからしめるところもあったろうが、個人的友誼、芸術の普遍性、芸術家の責務といった点のみを強調しているのに対し、達夫はあくまで国家、民族の立場に立っており、前者が少なくとも表面的には加害者意識がほとんど見られないのに、後者は当然のことながら何ゆえに戦わざるを得ないかを完全に認識している。新居は当時の中国通の一人であったはずで、彼にしてこういう手紙を達夫に書き送り、何か色好い返事を期待していたとすれば、そこに「日本国内の状況とあなたがたの呼吸している空気」をすべてよく知っていたという達夫の認識とは対照的な日本の文化人の状況認識の甘さ、相手の痛みに対する不感症が現れていると言えようし、まさしく「敵我之間」の埋めがたい間隔を感じないわけにはいかない⁵⁰。

当時の時局を考えると新居に対して少し厳しい気もするが、おおむね妥当なコメントではないだろうか。新居は新居なりの時局への抵抗をしていたのかも知れないが、郁達夫のおかれた立場や中国の実情を理解していなかったと言わざるを得ないだろう⁵¹。

以下では、当時の新居の中国に対する認識を考えるため、彼が中国について論及している文章や座談会を見ることにしたい。

3-3 中国に関する発言

まずは、1940年の汪兆銘南京政府樹立を受けて開かれた「新生支那」と題する座談会から見てみよう。

列席者は新居の他、作家の豊島与志雄、哲学者の谷川徹三、婦人運動家の市川房枝である。豊島と谷川は訪中してきたばかりであり、作家張資平が汪政府にいたという話も出てくる。魯迅を含む中国の作家・文化人、あるいは演劇などを話題にしながら座談会は進行するが、基本的には「こちら側」と重慶(蔣介石)政権側を区別し、日本の国益が第一に考えられているのである。例えば、女優の中には重慶から上海に戻っているものもあるという話を受け、次のような

会話が交わされている。

新居 さうすると、君、あの曹^{マア}禹^{マア}といふ人は、まアこつちの側みたいになつてゐる!?

谷川 さうぢやないよ。まだ向うにゐる。曹^{マア}禹^{マア}は劇作家だからね。上海へ来ようとしてゐる。聞いたけれど、あれはそんなに抗日派ぢやない。場合によれば……”⁵²。

この部分に限らず、この座談会の新居の発言からは戦争に対する批判は感じられず、むしろ日本の国益に立って発言しているように見受けられる。

また、別の文章の中では、次のようにも発言している。

戦争の側面に平和(今事変の場合には東亜の平和)と愛(支那人民に対する)が流れてゐるとき、われわれ文学者は戦争の固定観念でこれを見る必要はない。といふことを換言すれば、文学者は独自に何の同様もなく没頭して居ればいゝといふことである”⁵³。

日本の中国侵略を「平和」「愛」と見なすこのような発言を見ると、早くから中国に関心を持ち続けてきた新居もけして侵略に対して批判的なスタンスを維持できた訳ではなく、時には自ら侵略を肯定していることは否定できない。戦争期の新居の発言は、小松隆二や天野正子が指摘するように、生活者の視点から戦時体制に対し一定の距離を持ち得たのは事実だが、その一方で「日本」を相対化することができず、時に自らを軍部と同一の側に立たせたり、時流におもねたように見える発言をするなどしていたのである。

だが、その微妙なバランスをとり続ける必要は、やがてなくなる。新居は、1943年頃、筆を断って伊豆長岡に蟄居することになったのである。徳島中学時代からの友人の情報局総裁・天羽英二の配慮があったのだという”⁵⁴。

3-4 『支那在留日本人小学生 綴方現地報告』

最後に一冊の本を紹介しておきたい。それは新居格編『支那在留日本人小学生 綴方現地報告』と題する本で、1939年10月に第一書房より出版されている。同書は中国に住む一年生から六年生及び高等科の「日本人」小学生の作文を収め、付録として巻尾に「満洲篇」も収められている。収められた文章は、中国で暮らす日本人児童が体験したことや日常を描いたものがほとんどで、中には日本人の児童と中国人の交流を描いた、現在でも読むに耐えうる文章も含まれる。だが、そのようなものの中にも、蔣介石は悪い人だというような記述

など、戦時教育の影響が見え隠れしているし、さらには直接中国の軍隊や一般の中国人の素行について責めたり、日本軍の行動を賛美したりする文章も少なくない。

ところで、執筆した「日本人」小学生の中には、朝鮮人と見られる児童の作文もある。以下にその一部を引用するのは、「済南日本尋常小学校 尋五 劉貞姫」の作文である。

支那は広いところです。支那人の中には学校にいかない子供がたくさんおります。私が北京にゐる時、となりの支那人の子供に、年をきいて見ると、十五才です。学校は、何年生とお父さんがたづねると、まだ学校にはいつてゐませんといったので、びっくりしました。[中略]お父さんが「どうして学校にいかないのか。」ときくと、お家がまづしいので十六才か十七才頃に、よそのお家にはたらきにいくといひました。その時私は、日本人と生れた幸福がもつたいないやうな、かんじがしました。その支那人は、日本人のやうなかはいい顔つきでした。[後略]⁵⁵

この文章のみならず、朝鮮人とおぼしき児童のほとんどが、ことごとく日本人であることの喜びや日本への愛国心を記している。川村湊は、植民地朝鮮で書かれた小学生の作文に言及し、「朝鮮人の少年の作文は、表層の意味とは逆接する言葉によって作品を完成させている。」と述べ、「植民地の子供たちは、綴り方＝作文の教室で、自分の見方、考え方、感じ方とは常に逆の形として日本語の文章を書けば、それで高い得点、評価をもらえることを経験則的に知ったのである。だからこそ、そこでは達者な日本語文と、不自然で、紋切り型の内容とテーマが並列するのである⁵⁶」と結論づけている。ここでも、同じことが言えないだろうか。引用した文章など、どうしても落ち着きの悪い不自然さを感じずに強いられないのである。

さて、新居格は、どのような理由でこの書を編んだのだろうか。それは明らかではないし、実際の作業に新居自身がどの程度携わったのかも不明である。だが、巻頭に掲げられた編者(新居)による序文により、本書に関する新居の考えを知ることができる。それによると、少年少女による戦線記録である本書は、大人による現地報告とは異なった新しい示唆を与えてくれるところに価値があるという。「いつてみれば、この綴方集は、国民全体が、戦争を知り、支那の真の姿を知りうる「国民読本」と称すべきもの⁵⁷」だというのだ。これは、新居が戦前・戦中を通じて日本の文学者は中国を描き、中国の真の姿を知らしめるべきだ、と繰り返し述べていたことと符合する。が、それと同時に、本書の内容は、新居が「共栄」に名を借りた侵略に時に同調してしまったこととも、暗

に一致しているように思われる。

戦時下の新居格は、その特殊な時代を反映して、複雑な要素を孕んでいる。時流に批判的なスタンスを維持した、と断定したり、戦争に協力した、と断定するのではなく、彼の時代状況の中での葛藤を読み取るべきではないだろうか。

4 まとめ

本稿では、新居格と中国の関わりを、その二度の中国旅行や日中戦争期の発言などから確認してきた。中国との関わりを確認するだけでも、新居の多才さや多岐にわたる活動の一端を看取することができたのではないだろうか。

最後に、このような新居と中国の関わりが包含する問題群を三つ指摘することで本稿の結びとしたい。

第一に、日中アナキスト交流史における位置づけである。玉川信明『中国の黒い旗』⁷⁸を代表とする、日本の中国アナキズム研究も、新居の立達学園における講演には触れていないが、日中アナキスト交流史を彩る一つのエピソードといえるだろう。

第二に、日本人による「上海」（ないし中国）体験、「上海」（ないし中国）の叙述における位置づけである。西洋と中国が相半ばするハイブリッドなこの都市に多くの日本文学者が引きつけられてきた。新居の最初の訪中の前年には横光利一が訪中し、小説『上海』を書くことになるし、また吉行エイスケも三十年代初めには上海や中国に関する小説やエッセイを多く発表することになる。新居の最初の中国旅行は『近代生活』同人との旅行だったと先に述べたが、実は新居らが帰国後にそれぞれ大連・北京（北平）・上海・ハルピンの旅行記を発表した『近代生活』第一巻第九号には、北京（北平）を舞台とした小説「喇嘛寺附近（革命後の二人のモダンガール）」を寄稿した吉行が同誌へのデビューを飾っているのである。吉行は新居らが訪中する前に訪中経験があるようであるが、新居らの旅行が吉行の創作に刺激を与えた可能性も否定できないのではなかろうか。ともあれ、近年日本文学者と上海というテーマは多くの人から関心を持たれているテーマであり⁷⁹、新居の描いた上海の享楽施設や風景、あるいは小説「上海へ」等は注目されてしかるべきであろう。

第三に、ナショナリズム、特に戦時ナショナリズムと文学、アナキズム思想や綴り方運動の関係である。戦時下にあっても時流を批判し続けたと考えられていた新居の発言が、実際には複雑な様相を呈していることは先に確認したとおりである。ここでは、『支那在留日本人小学生 綴方現地報告』について一言補足しておきたい。同書の内容については先述の通りだが、同書の出版の背景を考えるためには、「綴り方運動」について把握しておくことが必要だろう。近

年の研究が明らかにしているのは、綴り方運動は戦前の興隆から戦時下の暗黒期を経て戦後に復活するという、以前に語られてきたような図式のように進展したのではなく、戦時中の戦争翼賛の綴り方も、以前からの生活綴り方運動の帰結であり、それがさらに戦後に受け継がれていったのである^{*60}。このことは、新居格自身の戦前、戦中、戦後の繋がりを考える上で示唆的ではないだろうか。新居自身、戦中の一時期筆を折ったものの、中国を描くべきであるという以前の主張の延長として『支那在留日本人小学生 綴り方現地報告』を編んだのであり、戦前と戦中、戦後を切り離して考えることはできないのである。

本稿が、忘れ去られた知識人・新居格に再び光を当てることとなり、上記のような問題を考える上での糸口となれば幸いである。

*1 現行の版は中野好夫補註。また、実際の翻訳作業の大半は別人の手によるものであることは後述する。

*2 林俊『アンドレ・マルロオの「日本」』（中央公論社、1993年）、67頁。

*3 『近代生活』第一巻第六号(1929.9.1.)、156頁。

*4 「洮南の一夜」、新居格『街の放物線』（尖端社、1931年）、354頁。

*5 新居格「旅の近代風景」（『近代生活』第一巻第七号(1929.10.1.)、前掲『街の放物線』にも収める）から、神戸から出た船は、十四日夜に瀬戸内海を航行中だったことが分かる。また、後に落ち合うことになる『近代生活』同人の作家・山田一夫とは神戸から同行していたことが分かり、おそらく山田も同じ香港丸に乗船して渡中したものと思われる（但し同文が『街の放物線』に収められた際には山田は「Y」と表記されている）。

*6 新居格「旅の近代風景」（前掲）。

*7 「支那・満洲座談会」堀口久万一・新居格・赤神良譲・中野江漢・佐藤惣之助・郡司次郎正・加藤武雄、『文学時代』四巻二号(1932.2.)

*8 新居格「洮南の一夜」（前掲）、354～366頁。ここまでは堀口、戸川も同行していたようである。

*9 新居格「踊り子リダ」、『街の放物線』（前掲）、341頁。ハルビンでは、加藤武雄およびナップの漫画家・柳瀬正夢と行動をとともにしたようである（無署名「ジェネラル・加藤武雄」、『近代生活』第二巻第一号(1930.1.1.)）。

*10 山田一夫「北京」、『近代生活』第一巻第九号(1929.12.1.)、35～37頁。

*11 新居格「鳩笛」、『街の放物線』（前掲）、367～369頁。

*12 新居格「上海の散警」、『犯罪科学』第二巻第十号(1931.10.)、154頁。

*13 注11に同じ。

*14 新居格「上海交會線」、『文学時代』第三巻第七号(1931.7.)、130～131頁。

*15 新居格「銀ブラ上海」、『中央公論』四十四年十一号(1929.11.)、198頁。

*16 注 11 に同じ。なお、内山書店で紹介されたという程祥栄という人物については不明だが、新居が 1934 年に再度訪中した際には、すでに上海にはおらず、「南京政府に節を屈した」と言われていたようである(新居格「上海—香港—広東」、聞人会編『世界を描く——隨筆五十人集』(立命館出版部、1935 年))。

*17 新居格「上海の散警」(前掲)、159 頁。なお、衛惠林、吳克剛はともにアナキストとして知られている。

*18 なお、新居はこの訪中以前にも、東京で中国人アナキストと接点があったようである。張景の以下の証言を参照。「一九二四、五年の間、東京には多くの中国人留学生が新たにやって来た。[中略]私と沈[仲九]君らは、[中略]辻潤、[中略]秋田雨雀、社会評論家の新居格、[中略]石川三四郎らといつも往き来して、あつい友誼を結んだ。」張景「アナキズム活動断片」嵯峨他編訳『中国アナキズム運動の回想』総和社、1992 年、453 頁。

*19 郁達夫「断篇日記五」、『郁達夫全集(第十二卷)』浙江文芸出版社、1992 年、285 頁。以下にその日の日記を訳載する。

二十一日(旧暦八月十九)、土曜日、快晴。

午前、本を二千字分翻訳し、半分を訳し終えた。午後出かけたところ、日本の近代生活社の新居格と山田一夫氏に出会ったので、かれらに付き添って午後ずっと遊びに行った。近代生活社は東京市牛込区南横町七十一号にある。安慶についたら彼らに手紙を書かなければならない。

新居格は東京市外高円寺に在住である。

*20 新居格「上海の散警」(前掲)、155 頁。

*21 新居格「上海の小集その他」、『近代生活』一卷八号(1929.11.1.)、73 頁。詳細は拙稿「[資料紹介]新居格「上海の小集その他」、『中国文芸研究会会報』第 250 期記念号(2002.9.29.)、49 ～ 50 頁参照。なお、拙稿に一言補足するならば、列席者の竹屋治三郎は升屋治三郎(支那劇研究会の同人で後に竹内良男、塚本助太郎と共に『京劇手帖』(三一書房、1956)を著した)の誤植と解することは妥当ではないように思われる。升屋治三郎は、すでに本名「菅原英次郎」として列席者のリストに加えられている。新居は上海滞在中菅原にドッグレース場「逸^{カニドローム}園」等の案内をされるなどの世話にもなっており、同一人物を重複して記すとは考えにくい。ここからは推測だが、「升屋治三郎」の筆名は、長唄の宗家である「杵屋」の「杵屋喜三郎」等をもじったものであり、これと同様に支那劇研究会の同人の誰かが、「升」と同様「杵」に字形が似た「竹」を使って「竹屋治三郎」を名乗ったのではなかろうか。

*22 新居格「上海の小集その他」(前掲)。

*23 「訳者序」、アンドレ・マロウ著・新居格訳『熱風——革命支那の小説』(先進社、1930

年)。

*24 新居格「昭和五年の文芸動向——その傾向、その予測、並に希望」、『近代生活』第二卷第一号(1930.1.1.)参照。また、新居の『征服者』評価及びその翻訳『熱風』については、林俊『アンドレ・マルロオの「日本」』(前掲)に詳しい。

*25 新居格「パアル・バツク夫人」『伝記』1935年1月号、181頁。

*26 新居格「上海の印象」『日本評論』1937年10号、365頁。

*27 ここまでの行程は主に新居格「上海—南京—上海」『文芸』第二卷第七号(1934.7.)による。

*28 この会食について、上海『大晩報』に記載があることは後述する。

*29 以上の行程は主に新居格「上海—香港—広東」(前掲)による。

*30 魯迅の日記にも記載が見える他、以下の新居の記述を参照。

[前略]わたしはその晩[五月三十日]初めて魯迅氏に逢つたのではない。わたしは内山書店の好意でその家に客となつてゐた。そこから程遠からぬところに住み内山氏とは特に懇意だった魯迅氏はよく内山書店に現れたものである。

五月二十三日の午後内山書店の店先で逢つてかなり長くわたし達は話し合つた。彼の言葉は重厚な調子で感じがよかつた。東北訛に似たものもあるかに感じたのは彼が仙台の医学専門学校に居たからかも知れない。彼の風貌は確りしたものを表示してゐた。眉は濃く眼光は猛くはないが威があつた。彼は無造作で質素であつた。それが彼をして一層好ましいものに仕立てゝゐるやうだつた。[中略]魯迅氏も曾ては大学教授であつた。しかしわたしの逢つたところは専ら著作の人であり、しかも蔣政府から睨まれてゐたらしかつた。そのころの彼は始終住居を変へる必要があつたといふことでもあつた。原稿も魯迅の筆名を使つては書かなかつたさうだ。上海の新聞雑誌に魯迅の名があまり現れないので、彼は殆ど仕事をしてゐないやうだと云つてゐたものもあつたが、仕事をしないどころか大に筆を執つてゐたのである。たゞ魯迅と云ふ筆名を用ゐなかつただけだ。その新たな筆名もどうやら魯迅らしいと嗅ぎつけられるころは更に新しい別の筆名を用ゐ、この数ざつと数十に及んだといふことであるから彼の迫害に対する身の処し方の程度が察せられるではないか。

わたしは内山書店の店先で彼と対座して話した。飯を喰ふために何でもするものを罵つてゐた[。]吃飯的法子と言ふのださうである。彼は流氓の政治と文学とを攻撃した。政治家にも大学教授の中にも文学者の中にも、流氓の徒輩の多いことを慨していた。流氓は流民であり無頼漢であり、ルムペンであり壮士であり、三百代言と云つた特性を綜合した意味だが政治、文化の畠でこれを云へば一定の主義信条なく、吃飯的法子のために悪く転向する連中のことを指称するものらしかつた。そんな風に憤慨する魯迅氏は主義と信念の下に操守を堅く持して迫害に屈しなかつたのである。魯迅の偉大はそこにも

ある。

わたしは大体人に揮毫を依頼するやうなことのない男だが、魯迅氏にだけは頼みたくなつた。彼も快く諾して自作の七絶を書いて届けてくれた。わたしのもつ唯一と云つていい懸軸は彼のそれだけだから年中わたしの居室の床の間にはそれが掛かつてゐるのである。それはまことにいゝ詩だとも思ひ魯迅のものらしい作だとわたしは考へてゐる。

その外に彼はわたしの子供に本をくれた。「引玉集」がそれである。そんな訳でわたしは内山書店で何度か彼に逢ひ、親しく交際したのであつた。（「魯迅の印象」、新居格『心のひゞき』（道統社、1942年）、242-244頁）

なお、新居が魯迅に贈られた七絶とは、有名な「声なき処にて驚雷を聴く」という句を含むものであり、毛沢東が言及したこともあり人口に膾炙している。文化大革命終結後に現れた「傷痕文学」の代表作として知られる宗福先「於無声处」（声なきところにて）の題名もこの詩から取られている。

*31 新居格『街の放物線』尖端社、1931年所収。

*32 新居格「上海へ」『文芸』1935年3月号、93-94頁。

*33 「蓮の実」、新居格『生活の窓ひらく』（第一書房、1936年）、334頁。

*34 『魯迅全集（第十二巻）』（人民文学出版社、1981年）、592頁。

*35 『竹内好全集 第十五巻』（筑摩書房、1981年）、64-70頁。

*36 顧偉良「書簡の中の“戦争”と“和平”——新居格・郁達夫往復書簡をめぐって」（『弘前学院大学文学部紀要』第37号、2001年）が新居が「中国文学研究会发起人」になつたとする（12頁）のは明らかな誤りである。

*37 新居格「誤伝を正す 中国文学研究会と謝女史」、『都新聞』1935年4月28日。

*38 「華麗島」、新居格『生活の窓ひらく』（前掲）、470-475頁。

*39 「菜園の逍遥」、新居格『野雀は語る』（青年書房、1941年）、107-116頁。なお、新居と台湾文壇との関わりとしては、彼が『台湾文芸』三巻二号（1936.2.）に「文学に於ける言葉の問題」を寄稿していることが挙げられる。また、これに遡ること一年、同誌の二巻四号（1935.4.）には、夭逝した台湾出身の作家・翁鬧の「東京郊外浪人街——高円寺界限」が掲載されているが、そこには高円寺の街でよく出会う名士として新居が紹介され、似顔絵も添えられている（同じ似顔絵が新居の「文学に於ける言葉の問題」にも転用されている）。

*40 「訳者のことば」、林語堂著・新居格訳『改訂版我国土我國民』（豊文書院、1938年）、3頁。

*41 『大地』裁判については和巻耿介『評伝 新居格』（文治堂書店、1991年）、89-99頁に詳しい。

*42 小松隆二「街の生活者——新居格」生活研究同人会編『近代日本の生活研究——庶民生活を刻みとめた人々』（光生館、1982年）、241-260頁。

- *43 天野正子『「生活者」とはだれか——自律的市民像の系譜』(中央公論社(中公新書)、1996年)、40-55頁。
- *44 「壺中語」、新居格『野雀は語る』(前掲)24-25頁。
- *45 新居格「戦争と文学者」『早稲田文学』昭和12年11月号、136頁。
- *46 伊藤・稻葉・鈴木編『郁達夫資料補篇(上)』(東洋学文献センター叢刊第18輯、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター刊行委員会、1973年)112頁「達夫訪日時の記事目録」により、12月16日の歓迎会に新居が列席していることが確認できる。
- *47 小田嶺夫『郁達夫傳——その詩と愛と日本』(中央公論社、1975年)、193頁。
- *48 以上は「敵我之間」『郁達夫全集(第八卷)』(浙江文芸出版社、1992年)、218-224頁による。
- *49 小田嶺夫『郁達夫傳』(前掲)、199頁。
- *50 鈴木正夫『郁達夫——悲劇の時代作家』(研文出版、1994年)、164頁。
- *51 付言すれば、郁達夫が手紙で述べた「私は我々はきっと握手して歓談する日が来と思っています。」という言葉は現実のものとはならなかった。郁達夫は終戦直後スマトラ島で日本の憲兵に殺害された。詳しくは鈴木正夫『スマトラの郁達夫——太平洋戦争と中国作家』(東方書店、1995年)参照。
- *52 「新生支那」[座談会]『大陸』第三卷第六号、246頁。
- *53 新居格「戦争と文学者」、原載『都新聞』1937年10月3日～6日(引用部は6日)、新居格『戦争と文化』(育生社(新世代叢書)、1941年)にも収める。
- *54 和巻耿介『評伝 新居格』(前掲)、103頁。
- *55 新居格編『支那在留日本人小学生 綴方現地報告』(第一書房、1938年)、160-161頁。
- *56 「海を渡った作文」、川村湊『作文の中の大日本帝国』(岩波書店、2000年)、101頁。
- *57 編者「序文」、新居格編『支那在留日本人小学生 綴り方現地報告』(前掲)、2頁。
- *58 晶文社、1981年。
- *59 このテーマに関する書籍が相次いで近年相次いで刊行されている。和田博文他編『言語都市・上海 1840-1945』(藤原書店、1999年)、劉建輝『魔都上海——日本知識人の「近代」体験』(講談社(講談社選書メチエ)、2000年)、趙夢雲『上海・文学残像——日本人作家の光と影』(田端書店、2000年)。
- *60 川村湊「海を渡った作文」(前掲)及び「教室の忘れ物——戦後の「生活綴り方」の展開」(『作文のなかの大日本帝国』所収)参照。